

ぼくの弟

高知市立一宮小学校

六年

泉

丈太郎

六年生になり、総合や社会の授業で人権にかかわる学習をしました。先生はいろんな質問をクラスのみんなにします。

「差別って何。」

「障害のある人をみてどう思う？」

「男の人が男の人を好きになることをどう思う。」

「識字学級のおばあちゃんの話聞いてどう思った。」

など、すぐに答えがわからないことを聞いていました。クラスのみんなは、

「普通じゃない。」

「自分たちと違う。」

とつぶやいていました。先生は、

「普通って何。普通について夏休み中に自分なりに考えてきてよ。」

と言っていました。ぼくなり普通に普通について考えてみました。

ぼくには弟がいます。ぼくが六才のときに弟が産まれました。

弟は生まれつきの障害「ダウン症」です。「ダウン症」とは約千人に一人の割合で産まれる障害で

、染色体の二十一番に変化があるそうです。弟はかぜをひくだけでも大変でした。弟に近づくとときは必ずマスクをして、ふれるときには必ず手を洗っていました。赤ちゃんだったときの、弟にそうすることがぼくにとって当たり前のことでした。つまり、普通ということですよ。ぼくは弟が産まれてくるまで、障害をもった人のことを自分とは違うからといって普通じゃないと思っていました。この考えが差別につながるのだと思います。ダウン症とか、ダウン症じゃないとかで考えるのではなく、ぼくはぼくのお母さんやお父さん接しています。これはぼくのお母さんやお父さんも同じです。ぼくや弟のいいところをみつめてくれて、できないことや困っていることは家族みんなはどうしたらいいか考えてきました。弟は立つことや歩くことにとっても時間がかかりました。弟は危険なことがわからないので、目ははなさないようにいつしよに遊んでいました。出かけるときにはベビーカーに乗せたり、お父さんが抱っこをしたりしていたので、お父さんは、「こしが痛い。」

と言っていました。人の何倍も時間がかかっていた、大変だと思うこともありました。弟が立つたり歩いたりできるようになったときのことを今

でもよく覚えていきます。ぼくの人生で一番の思い出となりました。

障害のある人への必要以上の特別あつかいはいらないということも弟から学びました。

普通のことができないと勝手に決めつけたり、障害のある、ないで人を分けていたりすることが自分にもあります。ぼくは、そのときの気持ちや言葉が正しいのか不安になり母によく相談するところがあります。ぼく自身にも差別してしまうころはあるのかもしれませんが、自分の本当の気持ちと向き合い続けることが大切だと思います。

弟が、「バカ。」と言ったとき、お父さんやお母さんは強くしかります。ぼくは注意しないときがあります。注意しないといけないことだとわかっているけど、注意しても弟にはわからないと思っけてしまいます。

これは、ぼくの中にある差別なのかもしれない。(今の言った言葉は必要だったのか。今、ぼくが言ったことで傷ついてないか。)など、よく考えます。自分の言った言葉や行動が正しかったのか、考えることができますのもダウン症の弟がいるからだと思います。ぼくは弟から学ぶことがたくさんあります。

「コウノドリ」というドラマで検査をしたらダ

ウン症だとわかって、産むことをあきらめるとい
うシーンを見ました。最終的には心が動いて産む
ことを決断していましたが、産みたくないと思う
気持ちが出来ません。

もし、育てていくことに不安を感じたり、悩む
ことがあったりしたら、必ずどこかに相談できる
人がいると思います。みんなで考えて解決できる
社会になってほしいです。みんな同じ人間で、一
つのいのちであることは変わらないのです。

「普通じゃない。」

この言葉は、ぼくのクラスでも悪気なく使われて
います。

この言葉が差別につながるというのを、みん
なが理解できる社会になるとうれしいです。そし
てぼく自身も自分の気持ちと向き合い続けていき
たいです。